

吉屋 敬 の夢現世界

何か美しいもの

初めにあたり、日頃アートについて考えていることをちょっと書いてみたいと思います。

〈移ろいやすく世に永遠で普遍なもの、それがアート〉

美やアートの観念は移ろいやすく、かつて存在し試されたアートの観念や表現は、今では古典的な過去の遺物となってしまったかのように思えます。ほとんど全ての表現法や技法上の可能性が出尽くしてしまったと思える今日は、アーティストたちが新しいアートを創り出すのが非常に困難な時代になってしまったのかもしれませんが。

でも本当にすべての観念と可能性は出尽くしてしまったのでしょうか？

そしてアートにはこれからどのような可能性が残されているのでしょうか？

今から16万年ほど前に私たち現代人の祖先であるホモ・サピエンスが出現しました。以来人類は絵を描くという行動を誰に教わることなく自然に行ってきたのです。スペインのアルタミラやフランスのラスコーの洞窟をはじめとして、世界各地に残された動物や人間を描いた先史時代の壁画、そしてメソポタミア、エジプト、ギリシャ、インド、中東アジア、マヤやインカなどの古代文明が残したおびただしい壁画や彫刻がそのことを証明しています。それらは原始的な呪術や祭祀的役割から今日のアートへと変遷していきませんが、人間が見たものをその通りに描きたいという原初的な衝動や欲求は、人類発生の初期から今日まで変わらないような気がします。



アルタミラ洞窟の壁画



ラスコーの洞窟壁画

まだ字も書けない幼児は紙と鉛筆やクレヨンを与えると、身近にいる両親や家族の姿を描こうとします。そして少し大きくなると人間の姿と一緒に花や木や家、太陽や景色などを描くようになります。絵心がないと自認している人でさえ、長電話をしながらメモ帳に意味不明な形象の落書きをしていることに思い当たらないでしょうか？メモに無意識に装飾が施されて、長電話の後でメモ帳におもしろい画面が残っているのに我ながら驚いた経験はだれでも持ち合わせているに違いありません。これは多分私たちが紙と鉛筆が目の前にあればいつでも何かを書きたい、描きたいという衝動を持っている証拠なのです。もし手元に紙も鉛筆もないけれど何か描きたいとい

う強い衝動が起こったら、私たちは引出しの中を探したり文具店に走ったりするでしょう。「描きたい」というその自発性は、何気ない落書きから一歩進んでアートを創ろうという意欲の顕れです。



クレヨンを手にした幼児



無心に絵を描く女の子

しかし、現代ではアートと呼ばれる範囲は拡大し、宇宙空間まで含めた壮大なものとなっているかに見えます。見た通りに描くというのが根源的な欲求だとするなら、長い絵画の歴史の中で、アーティストたちは題材の変化と表現や技術の変化を求めて、より独自のその時代のアートを創ろうという努力を重ねて来ました。その過程で様々な芸術ジャンルが生まれ、時代ごとに何々派と呼ばれる傾向や画派が発生しました。

それをもっと突き詰めた現代では形象自体がもう不要となり、抽象をも飛び越えた自由な制作形態が誕生することになったのです。絵画や彫刻というアートの根本的な概念も古びたアートとなって、制作過程の行動そのものがアートと呼ばれるようにもなりました。そしてついには、既成アートの破壊行動までもがアートの範疇に入ってくるようになったのです。

アートは常に変化し、常に新しいものを要求していることは確かです。人と違うものを生み出すこと、新しいアートを提示して時代と世界をリードしていくことは、アーティスト達に課せられた避けられない義務なのですから、アートが限定されず既成観念にとらわれず、何でもが可能な世界であることはよいことに違いありません。

では現代芸術とは一体何なのでしょう？

これからのアーティストたちは一体何をどう描いて行ったらいいのでしょうか？

ただひとつ変わらないこと、それは何かを描きたい、創りたいという人類発生以来の共通した衝動だと言えます。ありとあらゆる表現と様式と手段が試された後の多様性の中で、それでも一番古くて新しいもの、最も普遍的で変わらないもの、それは見たものをその通りに描きたい、創りたいという、人間の DNA に組み込まれた衝動なのです。全てが探されたと思える現代でさえ、そこにはまだ沢山の新しい形象や表現を盛り込む余地は十分に残されているし、それを発掘して提示することは、現代のアーティストたちに課された実に素晴らしい実験だと私は思っています。

そう、アートはいつも新鮮でエキサイティングな実験なのです！
絵画の原点に立ち戻ること。
そこに新しい独自の何かを見出すこと。
何か美しいものを創り出すこと。
私はそんなことを日々思いながら制作し続けています。

《吉屋 敬》



ギリシャ正教教会の壁画（マドンナ像）